



## 「あまおう」1月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

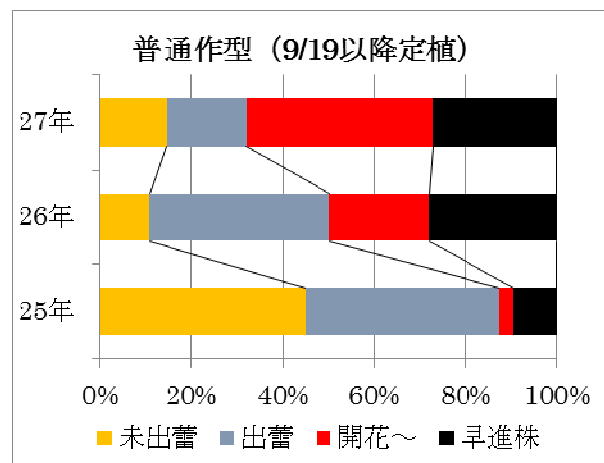
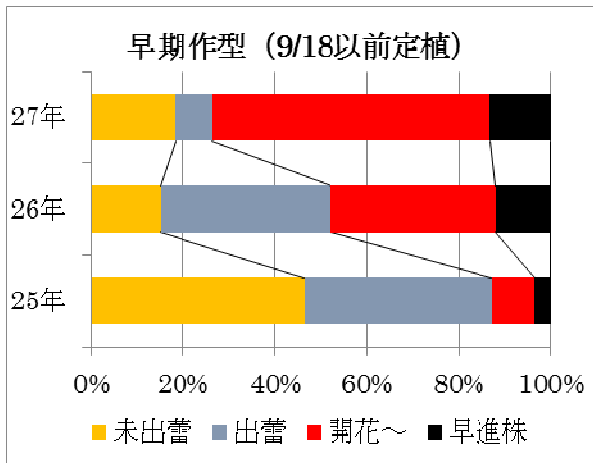
### 10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

1 1月以降の高温により、生育は徒長気味で、果実については着色が早く進み、玉落ちが早く、全体的に小玉傾向です。

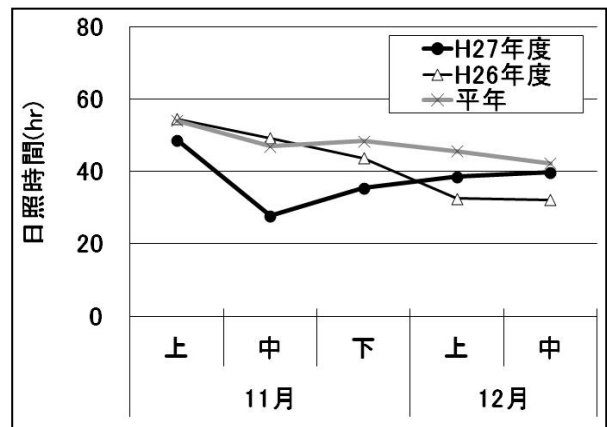
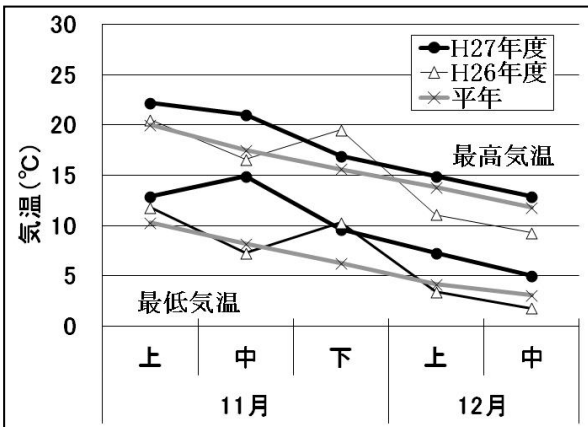
現在、1番果房については早期作型がほぼ終了、普通作型では3～4果収穫となっています。1～2番の果房間葉数は早期作型で4～7枚、普通作型で3～5枚と昨年並みで、2番果房の頂果が早期作型で親指大～着色期、普通作型で着果～親指大となっています。また、昨年同様早進株の発生割合も多くなっています。

今後、株に負担がかかってきますので、高めの温度管理と長めの電照管理で草勢を維持するよう心がけて下さい。

年度別2番果房出蕾状況(南筑後普及指導センター管内:12月10～15日調査)



〈 最高・最低気温と日照時間(アメダス久留米より) 〉



☆展葉速度を意識し、「わい化」させない管理に心がける。

わい化の原因：①成り疲れ、②低温管理、③電照不足、④早進株

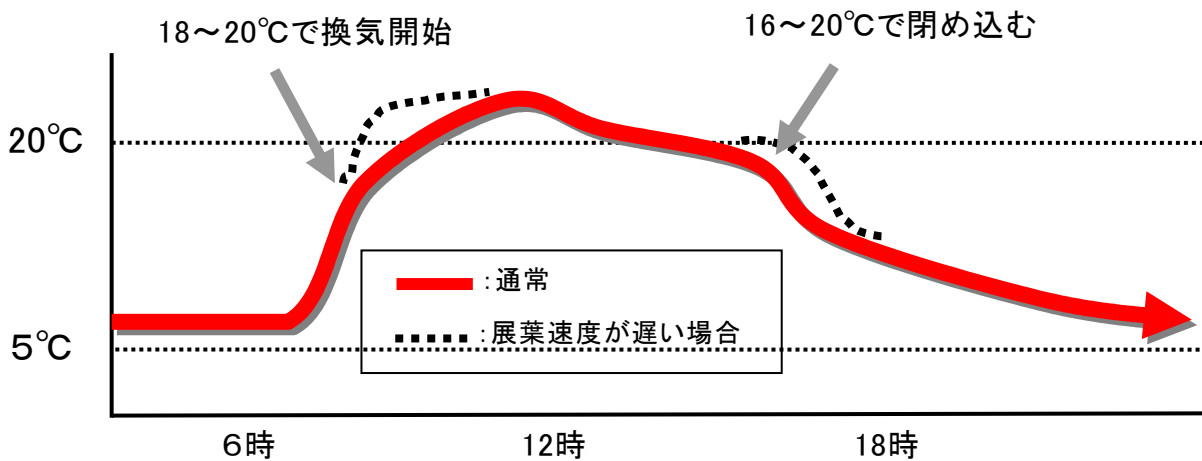
## ○温度管理

- 2番果房の収穫開始までは、昼温（特に午前中）を高め管理し、心葉の展開や果房生育を促進する。
- 電照時間を延ばしても心葉の伸びが悪かったり、展葉速度が遅くなった場合は温度を上げる。（設定温度を上げる、午前中は遅めに換気する、夕方早めに閉めこむ等）

【果房の生育状況別温度管理の目安】

	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期間	20～24℃	5～7℃	収穫期間中は品質向上のため、やや低めの温度管理
1番果房収穫終了から 2番果房収穫開始まで	24～26℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果房の出蕾を促すため高めの管理

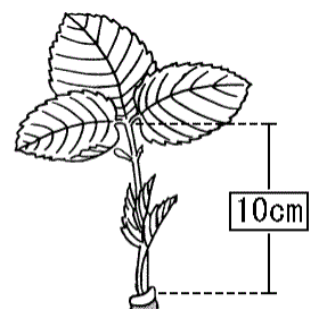
## 1日の温度管理模式図



## ○電照管理

草高は高くても、着果負担と低温により心葉が小さくなって、展葉が遅くなっているほ場が見受けられます。

- 電照時間の調節は、必ず心葉の展開状況を観察して行う。
- 厳寒期は、生育が旺盛な場合でも電照を完全に切らない。
- 心葉から2枚目の葉が3枚目の葉より小さい場合は、電照時間を長くする。
- わい化してくると、外葉は大きくても心葉が小さくなってくるので、必ず隠れている心葉を確認する。



心葉展開時の  
葉柄長10cm

【電照時間調節の目安】

	時間を長く	現状維持	時間を短く
心葉の葉柄長	9cm以下	9～11cm程度	11cm以上
心葉の色	濃緑色	緑色	黄緑色
着果負担	増加	並	減少
予想気温	低温	並	高温

(裏面へつづく)

## ○かん水・肥培管理

- 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- 暖房機の稼働時間が長いと乾燥しやすくなる。そのため、高めの温度で管理する場合、葉からの蒸散量が増えるためかん水量を増やし、こまめなかん水を心がける。
- かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする。（朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする）
- 液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上げる原因になるため、液肥の施用を減らす。
- 液肥の施用量は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを目安とし、これを3～4回に分けて施用する。

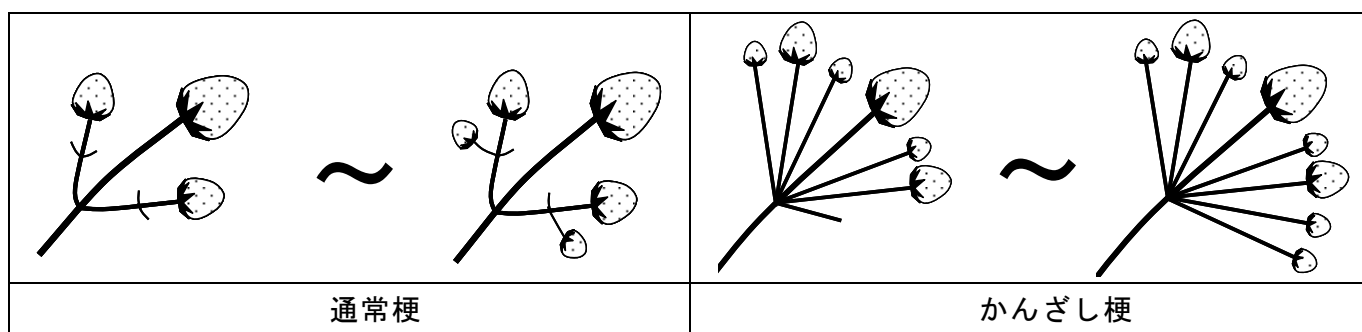
## ○株整理

- 収穫が終了した果梗枝は早めに除去する。果梗枝が残っていると、3番果房の出蕾抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因にもなる。
- 無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。
- 下葉は枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- 葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果が多くなるため玉出しを行う。
- 株整理は、収穫量の少ないうちに行っておく。

## ○摘果

- 2番果房の摘果は、3番果房の連続的な収穫を目的に行う。
- 摘果は、下表を目安に行う。草勢が強い場合は多めに残し、草勢が弱い場合は強めに摘果し、少なくする。

（ 通常果梗：3～5果/枝  
かんざし果梗：6～8果/枝 ）



## ○早進株の対処方法

- 摘果を強めに行うことで着果負担を軽減し、株の弱りを防止する。
- 摘果は小果を中心に行うが、頂果でも果形が悪い場合は、積極的に摘果を行う。



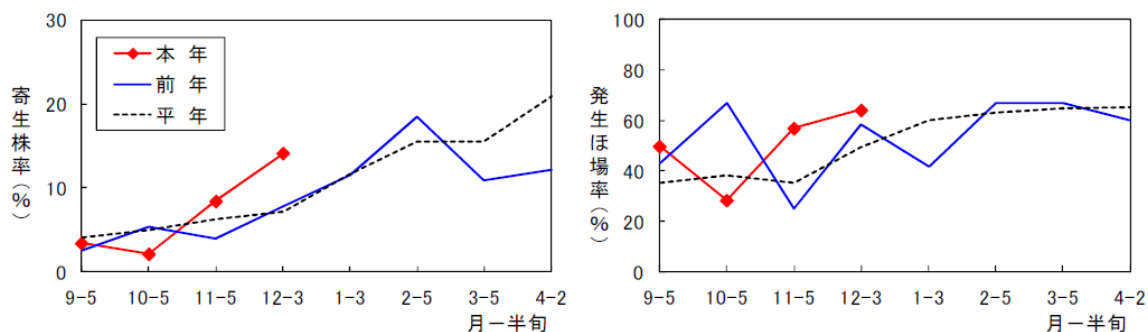
## ○病害虫防除

現在、うどんこ病の発生が増えている。また、灰色かび病の発生も散見される。害虫ではハダニ類の発生が見られる。

防除は晴天日に行い、散布した薬液が速やかに乾くようにする。

### ○ハダニ類

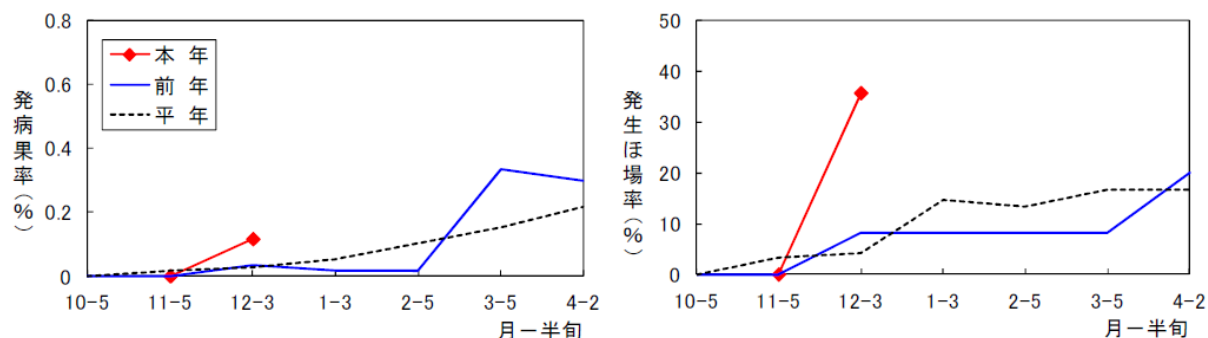
- 活動の衰える厳寒期に防除を徹底し、2月以降の急増を抑える。（株整理の後が防除に最適）。
- チリカブリダニ（天敵）の放飼は、1月中旬～2月上旬に行う。
- チリカブリダニ（天敵）を放飼する前に、天敵に影響のない農薬を散布し、必ずハダニ類を徹底防除してからチリカブリダニ（天敵）を導入する。



ハダニ類の発生推移  
＜福岡県病害虫防除所調査＞

### ○灰色かび病・菌核病

- 今後、本格的に寒くなるにつれ、ハウスを閉めこむことが多くなり、湿度が高くなりやすいため、灰色かび病・菌核病が発生しやすくなる。そのため曇雨天日が続く場合は、短時間でも出来るだけ換気を行う。また、暖房機の送風や循環扇を活用する。
- 特に、二重被覆をしているハウスは湿度が高くなりやすいため注意する。
- 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。
- 薬剤により、定期的（10～15日毎）に予防散布を行う。



灰色かび病の発生推移  
＜福岡県病害虫防除所調査＞

### ○うどんこ病

- 定期的に薬剤を予防散布する。
- 防除が遅れると、まん延しやすいため早期発見、早期防除に努める。
- 発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!**